

書評

富田 康之 著

## 『海音と近松 その表現と趣向』

早川 由美

日本文学史について少し知識のある人ならば、元禄時代の文学者として著名な三人の名前を挙げる事ができるだろう。韻文(俳諧)の松尾芭蕉、散文(浮世草子)の井原西鶴、戯曲(浄瑠璃・歌舞伎)の近松門左衛門の三人である。ほとんどのワープロソフトで一発で変換する。

小中学校の教科書における古典教材で芭蕉にふれていないものはなく、その説明文の多くは芭蕉によって俳諧は芸術的に高められたとか、芭蕉が出て俳句が盛んになったなどと芭蕉を非常に持ち上げている。西鶴は『好色一代男』によってそれまでの仮名草子から浮世草子へと変貌させたことで文学史に画期的な一歩を記し、後続の浮世草子はほとんどその影響下にあると言っても過言ではないだろう。そして、近松の『出世景清』は古浄瑠璃から当流浄瑠璃への変換をなさしめた作品である。坂田藤

十郎と組んで和事芸の完成にも関わり、戯曲の構成の妙、近代的鑑賞にも堪えうる人物造形などで評価が高い。この三人は、今までの文学史ジャンルを大きく変えた人物なのである。そのため芭蕉以前の守武や貞徳・宗因の知名度は芭蕉の比ではなく、次に俳人として名前が上がるのは蕪村ではないだろうか。西鶴以後で『雨月物語』の上田秋成や『南総里見八犬伝』の滝沢馬琴までの間に書かれた作品や作家の名前を記憶している人は少ないだろう。近松以外の劇作家としては文化文政の歌舞伎の鶴屋南北まで飛んでしまうことも少なくない。江戸時代文学史は元禄と化政の二つの山で理解されることが多い。

芭蕉はすでに江戸時代において「俳聖」として神格化され、他の俳人たちとは別格扱いになっている。研究も芭蕉とその影響を受けた俳人たちを中心に行われている。八文字屋本を始め浮世草子の多くは、西鶴の本文を巧妙

に取り込んで作品化しており、研究史上それら後期浮世草子は西鶴の「剽窃」として一段低く見られる時代が続いた。演劇研究の分野においても、近松研究は盛んである。この三人に対する特別意識は一般社会だけではなく研究の場においても根強い。後続の作家研究は最初からこの三人の偉大さと比較されるハンディを背負っているのである。

本書の題名になっている紀海音は、近松と時代的に近いことから比較されることが多い。人情の機微を叙情的に描いた近松に対して、海音は理論的に人情をも割り切って描くという対照的な面を持つことは作品を通してうかがえる。筆者は「序にかえて」の第一声で以下のように述べている。「従来、紀海音の評価に関しては近松門左衛門のそれと比較して述べられることが多く、その場合、ほとんど全ては近松に劣るものとされてきた」として、比較基準が海音不利なものであることを指摘し、海音の基礎的研究を踏まえて、評価を見直そうという意図が本書の目標であるとす。二人の比較基準が近代にも通じるものであり、そのために「人間洞察・信条追及」に対する深淺や悲劇性の強弱に関する観点、あるいは趣向、表現の観点からなされ、一方的に近松に軍配が上げられ」ている現状を指摘し、海音が近松と同じ傾向の作

品を創作しようと志向していたのかという疑問を呈する。まず、この基本姿勢に敬意を表したい。近松や芭蕉・西鶴の作品を基準にして他の同時代作品の価値を決定することへの疑問は、俳諧研究の場や浮世草子研究の場ではすでに行われている。他の浮世草子作家について、西鶴に比べて人間が描かれていないという観点から否定的に見るのではなく、作品ごとの趣向の問題を考える論文なども見られるようになった。芭蕉の芸術的な俳諧と比べることで、同時代の談林俳人や前句付・雑俳などを格段に低いものとして切り捨てていくのではなく、芭蕉の突出した俳諧観とその他多くの俳人達の俳諧観を俳壇史の中で見据えていかなければならないという指摘も出てきている。演劇関係ではいまだにその検討が不十分ではないだろうか。海音や菅専助などの全集が刊行され、基本文献は揃えられてきているが、その作品の基礎的研究や評価などはまだ緒に就いたばかりであるうし、近松と切り離しての評価はまだ少ないようだ。

本書は海音の基礎的研究を踏まえた上で近松との比較を行うという基本方針を掲げ、「序にかえて」において、「忠義」という語の分布を調べ、近松に比較して葛藤が少ないことによる海音の「分かりやすさ」や「大衆性」が観客に支持されていたことと、太夫の語り口にも合致

していたというまとめがされた。「悲劇」性で評価する近代的視点が海音の意図と異なる不公平な基準であるとすることと合わせて、筆者が挙げた海音の評価されるべき点とは、そのまま海音が近松に劣る点として扱われてきたものである。

本書は三部構成で、第一章は海音の時代物、第二章は海音の世話物の分析を扱い、第三章で近松の時代物と世話物を取り上げている。その中で、今までの評価基準と異なる観点を見つけ出すための方法論の確立に向けての基礎作業がなされている。

第一章は、海音の時代物の趣向についての基礎的研究がまとめられている。海音作品中の「身替わり」「自害」「子殺し」などの浄瑠璃一般の趣向と「忠義」「義理」「孝」といった道義との関わりの検討が最初にあり、「孝」が三段目に仕組まれるかどうかで海音作品は前後期に分類できるという指摘がなされた。次に「場」と趣向の関係を調査し、特定の趣向が「場」を同一にする傾向があるかという結果が得られた。そして謡曲、『伊勢物語』、『曾我物語』といった典拠の利用の仕方を丁寧に検討したデータがまとめられたものである。

その結果、海音と近松の利用の仕方大きく異なる所や特別な点は見出されず、浄瑠璃一般で言われている趣

向や段の問題とのはっきりとした違いはない。趣向の組み合わせなどに見られる安定感、海音の「分かりやすさ」「大衆性」と関わるもので、海音の堅実な創作態度を追究したものになった。浄瑠璃の作劇において多くの作品に共通する趣向や設定、近松が利用して成功した方法などの中から、海音が取捨選択して作品を作ったということになる。

第一章は、近松研究ですでになされている典拠の問題や趣向や場についての分析を、海音の作品に基づいて行った論考である。近松と同様な分析研究からは海音の評価を変えるような結果を導き出すことは難しい。富田氏はそれを承知した上で基礎作業から始めて趣向や場などの共通性を明らかとし、そこから浄瑠璃という作品の構成としての特色、近松と海音の相違点へと広がっていくという方向性を示した。

第二章は、海音の世話物の構想、人物設定についての論文で構成されている。そこでは心中物浄瑠璃の検討を通じ、従来「犯罪物」とされてきた『八百やお七』を心中物とし、『袂の白しぼり』『なんば橋心中』と合わせて心中三部作として位置づけた。〈滅罪〉の構想を共通して持つこの三作は、興行に関して冒険的でない海音が、完成度の高い同一構想を基調として作りあげたものとす

る。これも、観客にとつての安定感につながり、海音の作の「大衆性」を示すものといえるだろう。海音自身の完成度の高い作品『袂の白しぼり』の趣向をくり返し利用して三部作を作ったというまとめになる。一章では、近松作品との共通性がうかがえたのであるが、第二章では構想のバラエティに関して二人の異質さが見えてきた。三部作とした作品の分析によって、これらが非常に共通した構想を持っていることが明らかになった。海音の評価を高めることには残念ながら直裁的につながっていないが、基礎的研究を行ってから次へ進むという姿勢は時代物の分析であつた第一章と同様である。

第三章は近松の作品構想や趣向、人物像の分析により、悲劇性の高さ、人物設定の妙などを確認した論考である。海音と近松という同時代に活躍した二人の作家の本文分析を通してその共通性、相違点を明らかにすることで、双方を見直そうという試みが、本書における富田氏の立場である文学作品の評価が個人の獨創性に依つて決定されている現在の枠組みの中では、本書の取り組みで明らかにされた海音の安定を求める創作態度は、近松に劣るという評価を変える新しい視点を見つけ出すに至つたと言ひ難い。

「あながき」の中で近松が「一つの典拠を奇抜な発想

を元に種々の趣向に仕組む」という創作態度であるのに対して、海音は一つの安定した構想によって素材を取り替へながら創作していくという大きな違いがまとめられている。近松と海音とが異なる点を海音が劣る点ではなく、その獨自性として評価するためには「幅広い観点からの考察」していくことなど、課題がまだ残されていることを筆者自身が認めている。

富田氏は本論考で北海道大学から博士(文学)の学位を取得された。新しく見つけ出した素材を取り込んだり新奇な表現を使うものではなく冒険をせずに堅実である点で氏の研究態度も、どちらかといえば近松よりも「海音」的であると言えるかもしれない。それだけに、ここからどのように研究を進めて海音をどう位置づけ評価していくのか、本書は今までのまとめであると同時に今後の課題を明らかにしている書であり、今後の研究の進展に注目したい。

〆二〇〇四年三月刊、北海道大学図書刊行会刊、六〇〇〇円

(はやくわ・ゆみ／愛知淑徳大学非常勤講師)